

LOUIS I KAHN ARCHITECT FAIA

Professor Kenji H. Noss
Masashi Institute of Technology
Japan.

Dear Professor

Meis Van der Rohe said "God is in the details"
Your book reminded me of his words.
How beautiful is your book of choices
which exemplify to evidence the eternal
qualities of a work of art.
Present works in Japan seem to be modifications
of Western work. The magazines seem to be fascinated
by work outside your country. Why is this so
when the examples shown in your books are so
inspiring in their true sense of Japanese spirit.
How marvelous it is that the desire to express -
the only reason for living - can take so individual
an image and yet evoke the sense of agreement
stemming from a single mysterious source.
Your book adds a great deal to the feelings of the
reader of men. I thank for the gift of this book.
With sincere regards,
L I K Kahn Dec 14 72

1501 WALNUT STREET PHILADELPHIA 2 PENNSYLVANIA LOCUST 3-9844

ルイス・カーンからの手紙

『伝統のディテール』をカーンに新居千秋氏を通じて送ったところ、自筆の感動的な手紙が送られてきた。
1972年12月14日の日付があるように、1974年3月に死亡したカーン最晩年の手紙。

PART-1

研究室時代の広瀬作品

ここには専任教授として武蔵工大に赴任してからの広瀬謙二作品を集めてある。広瀬自身が述懐するように、大学に研究室を構えた当初は実施設計から監理まで、通常の設計事務所のように行っていたが、次第に数が減り、最後は基本設計だけになる。
また、初期には事務所時代の延長的なシステム設計指向、「建築部品化へのアプローチ」を踏襲する作品が目立っていたが、だんだんと伝統的な建築への傾斜を強め、古建築の復原、歴史的文化を背景とした作品が多くなる。(编者)

- SH-67 (一柳邸) 1968年
- 共栄工業KK 1968年
- SH-70 1970年
- SH-72 (宮本邸増築) 1971年
- 山下邸茶室 1971年
- 肆木の家 1983年
- 富士市高床建物 1985年
- 長谷川病院C棟 1987年
- D棟 1991年
- 三殿台住居跡保存整備計画案 1990年
- 上野国分寺ガイダンス棟実施設計 1991年
- 上野国分寺築地塀復原 1992年

SH-67(一柳邸)

竣工：1968年



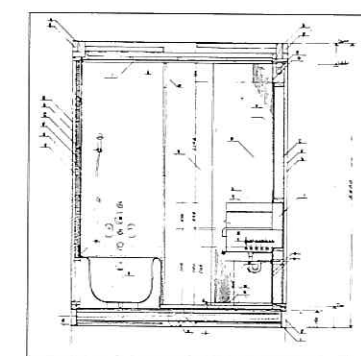
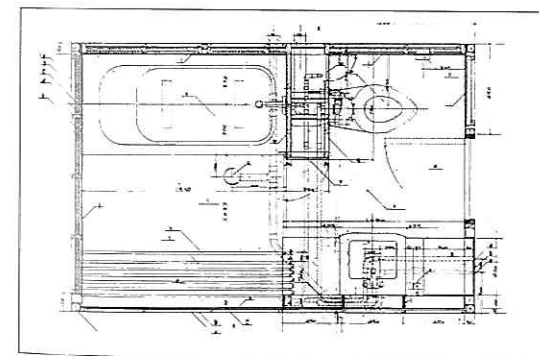
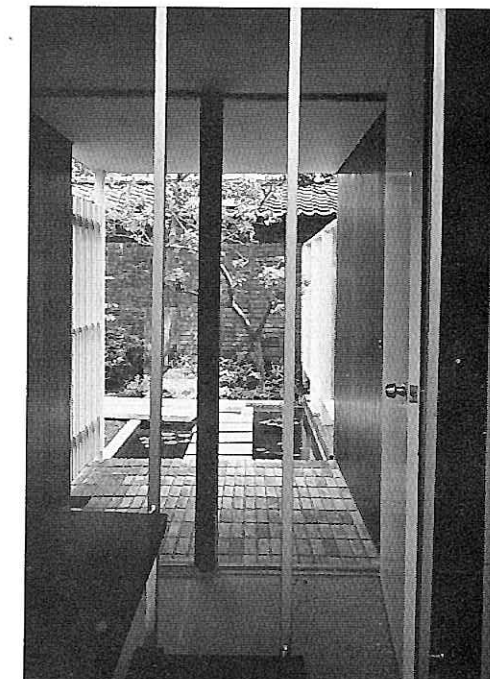
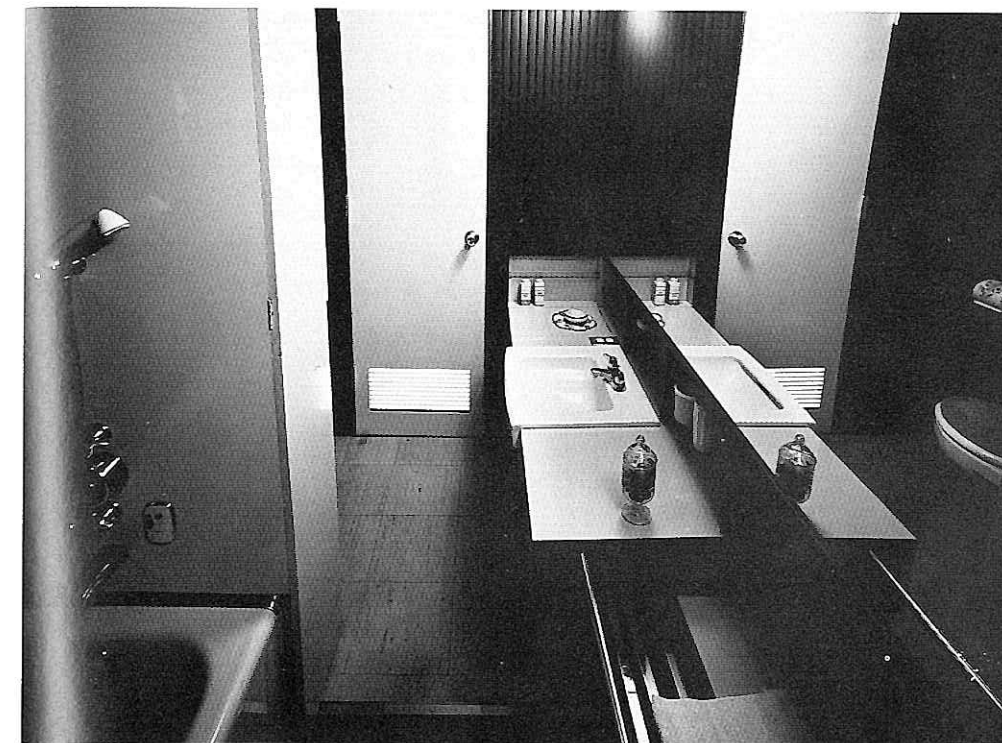
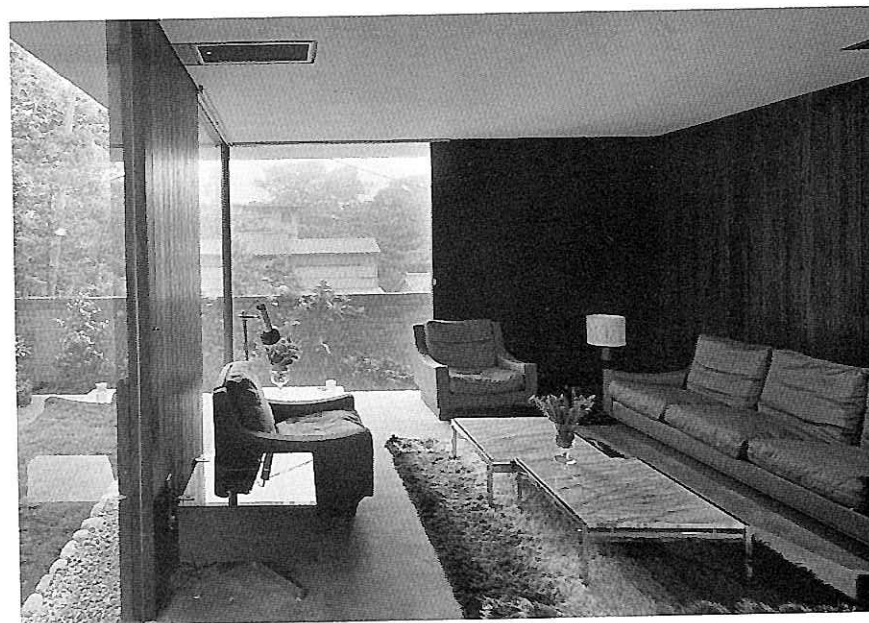
これは大学に来て、研究と実施設計を両立させようとしていた時代の作品である。

当時は、ボックスユニットをテーマとしていたときで、これまでは平屋しかつくっていなかったのを、このときは2階建てに重ねるシステムにしようと試みたものである。

ユニットを組み合わせるプランニングシステムだけでなく、ユニットの機能分析、生活備品の寸法と量の徹底した調査などの資料化をもとにして、それらを手順通りに行ったらどんな結果になるかという、「設計システム化」の実験でもあった。(広瀬)

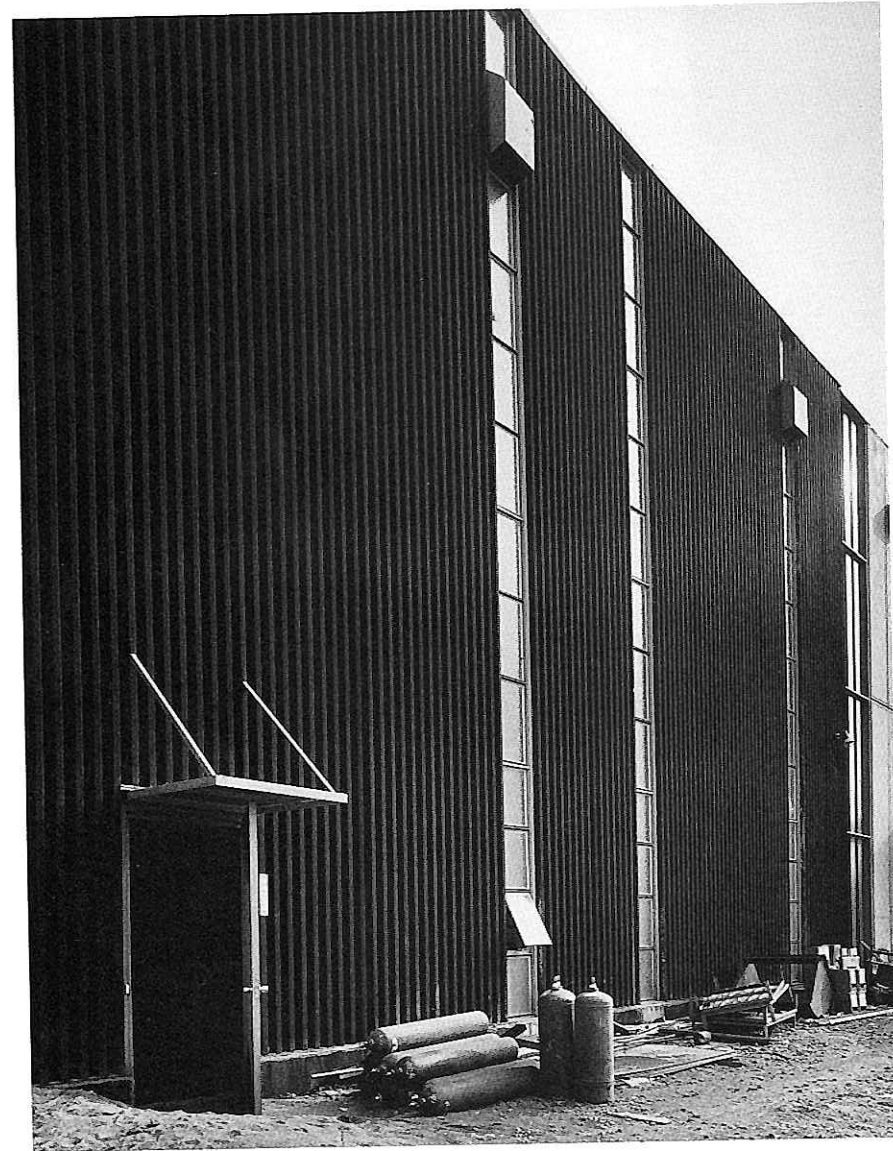
PHOTO: CHUJI HIRAYAMA

PHOTO: HIROAKI MISAWA



共栄工業KK

竣工：1968年



スチール家具の工場である。とくに、これのようにアセンブラインを主体にした工場には、ハードな機能はない。必要なのは可能な限りフレキシビリティの高い空間、つまり、何の障害物もない大空間である。

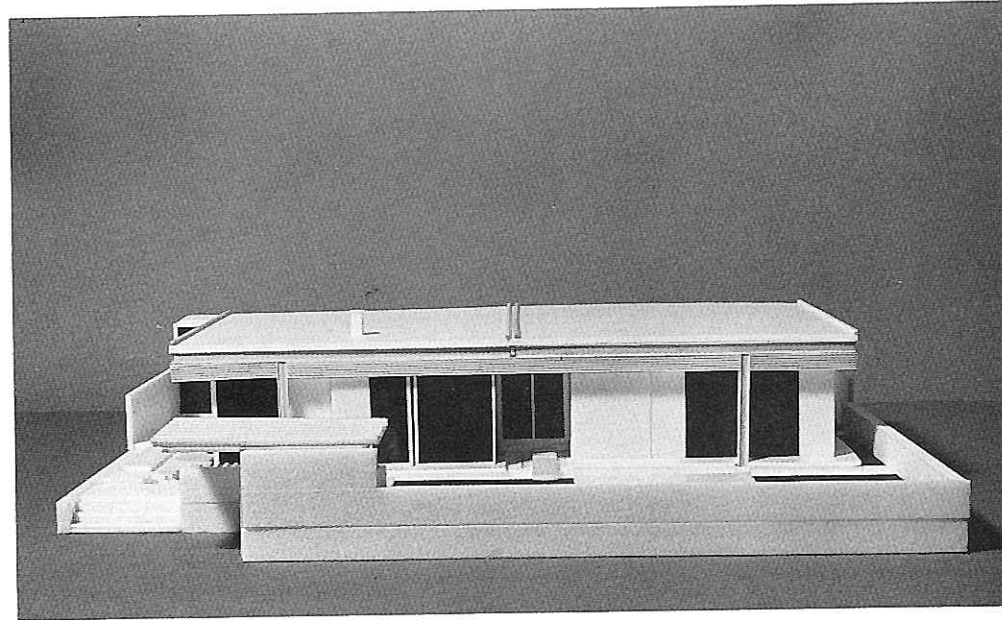
ここで試みようとしたのは、固定されるのは屋根だけで、ほかはすべてオープンという裸の建築である。したがって、遮断を必要とする外壁なども、大形PCパネルとコールテン鋼のWデッキ2枚合わせの、単一寸法材で統一した。(広瀬)

PHOTO: CHUJI HIRAYAMA



SH-70

竣工：1970年

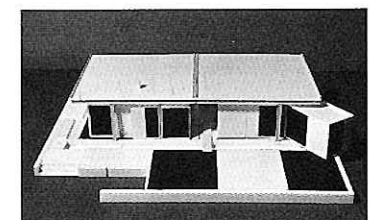
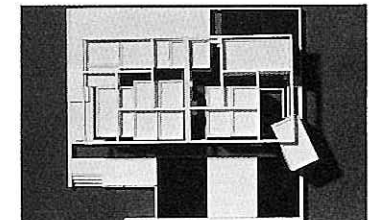
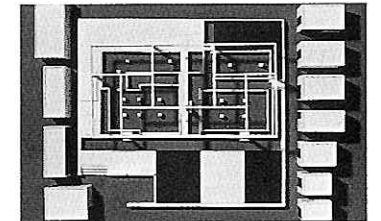
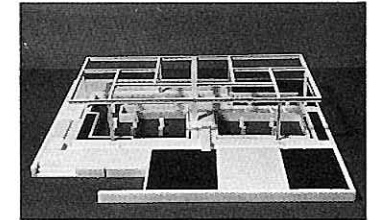
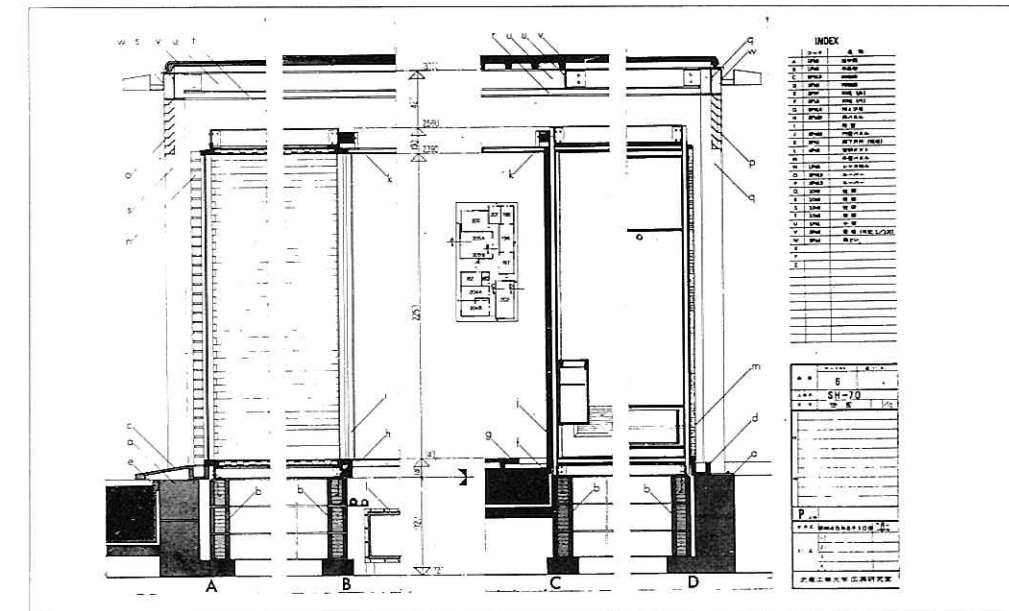
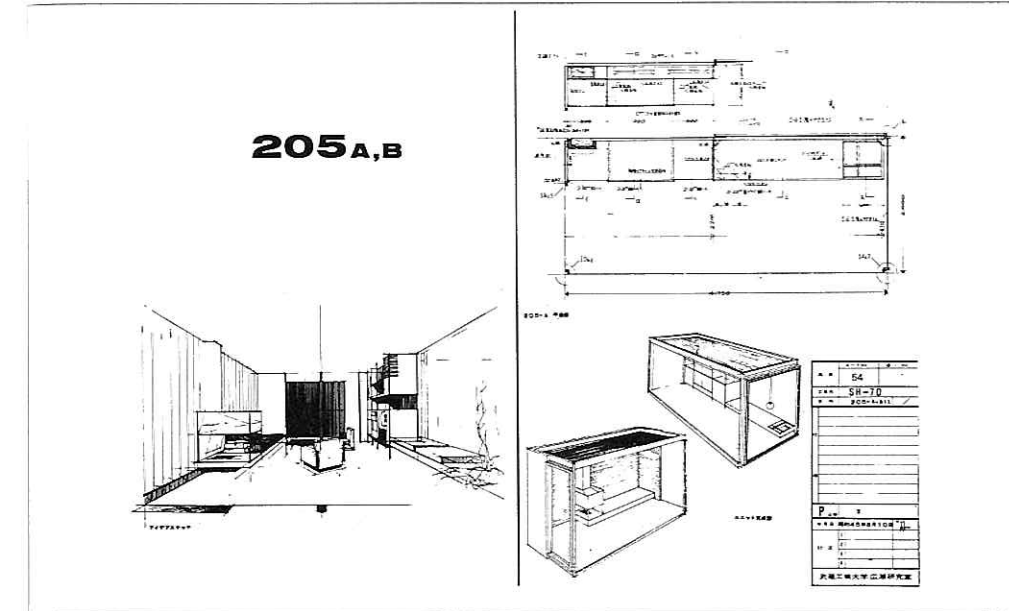
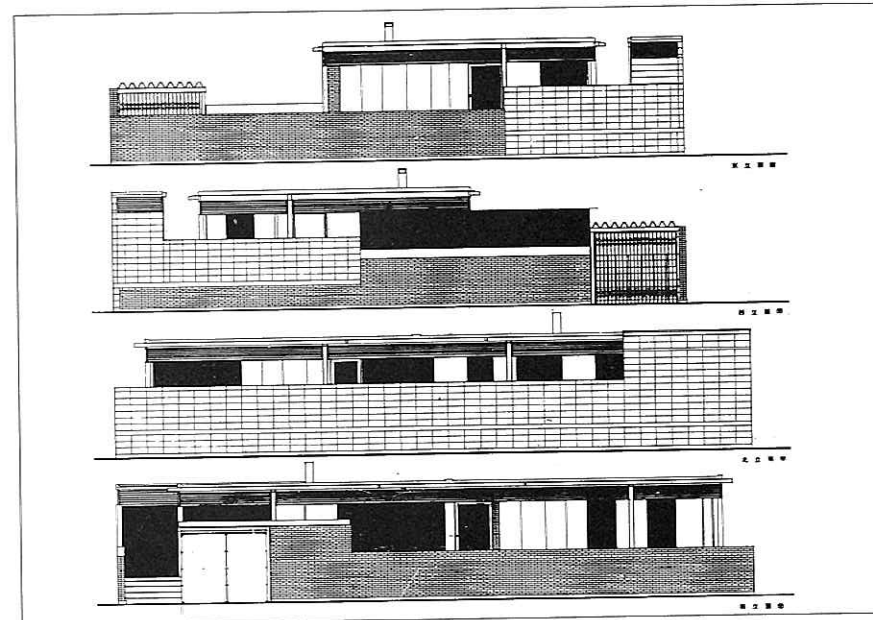


これは東芝住宅から委託された工場生産住宅の展示用モデルである。

テーマとしてはボックスユニットであるが、ユニットを自由に組み合わせられるようにしたいと考えた。そのために、全体のシェルターとしてのフレームもユニット化して、必要に応じて空間を自由に増減できるようになっている。

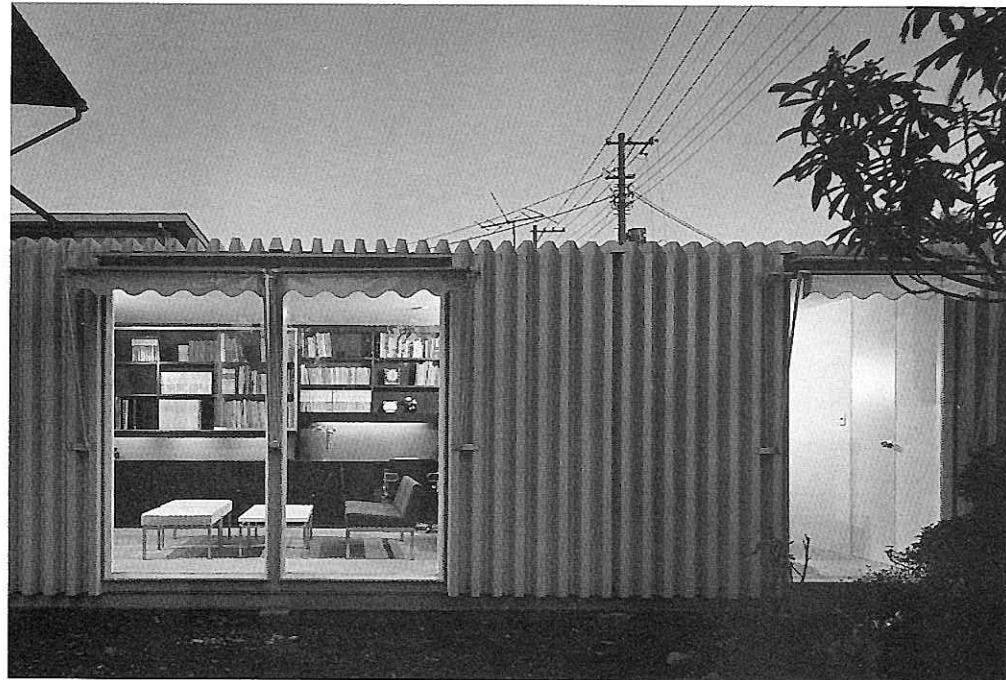
SH-67同様、研究と実施設計の両立を意図して、学生たちによって設計監理された。(広瀬)

PHOTO: HIROAKI MISAWA



SH-72 (宮本邸増築)

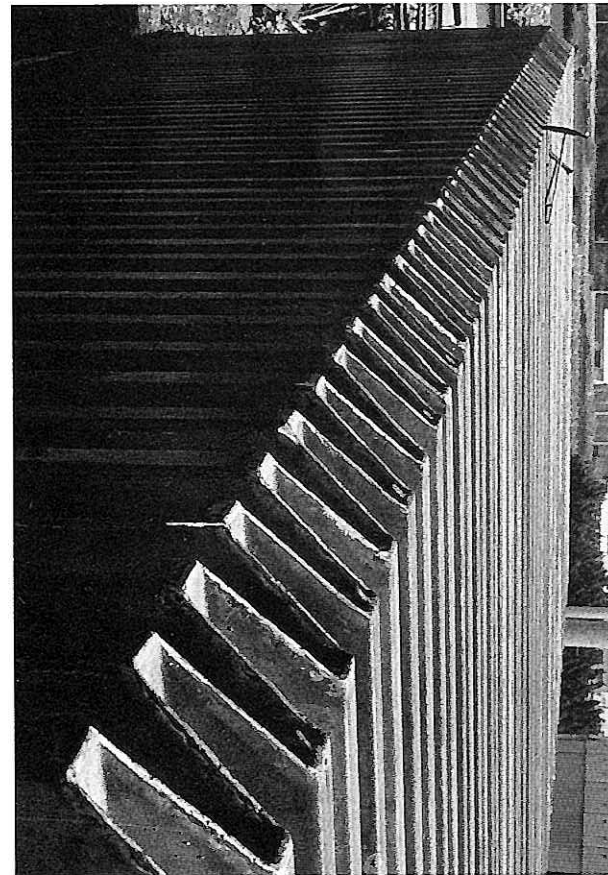
竣工：1971年



これは、SH-21の増築である。この当時は、工場生産の理想をスペースユニットと考えていたので、自邸をはじめ数種の家を試みていたが、これもそのひとつである。

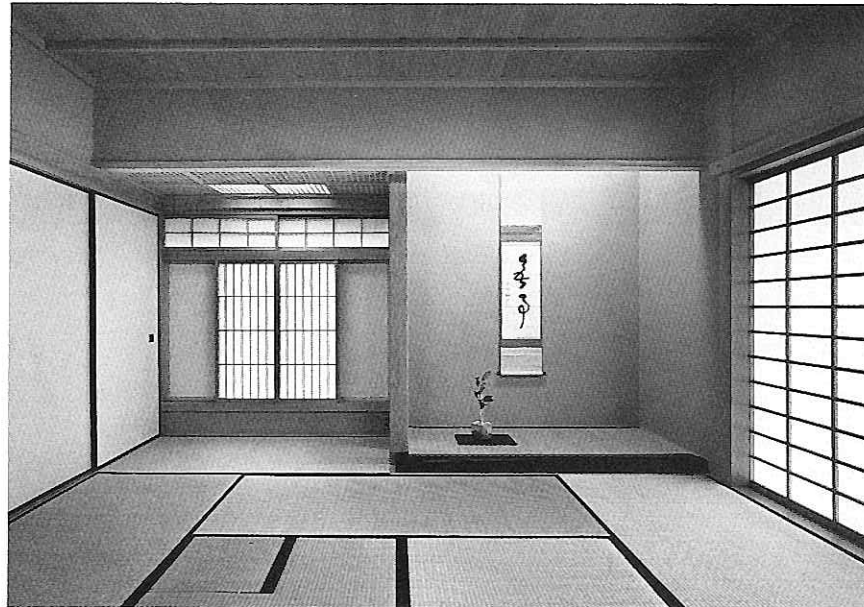
これでは東芝試作の家をさらに一歩進めて、単位ユニットだけで、すべての要求機能や性能を満足させ、生産工程も単純化させる目的で、Wデッキのボックスにパネルとウォールキャビネットで内装し、現場組立は並べるだけという案である。(広瀬)

PHOTO: HIROAKI MISAWA



山下邸茶室

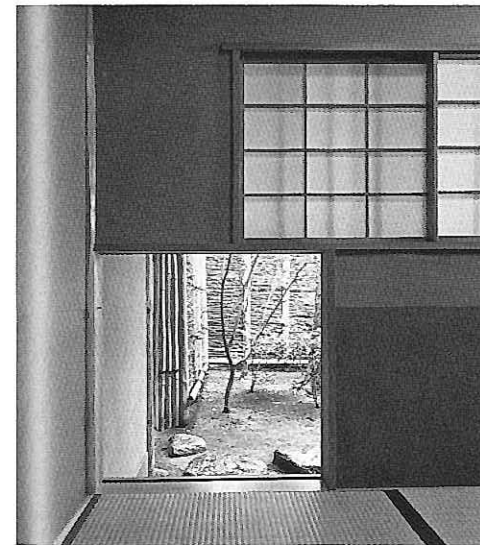
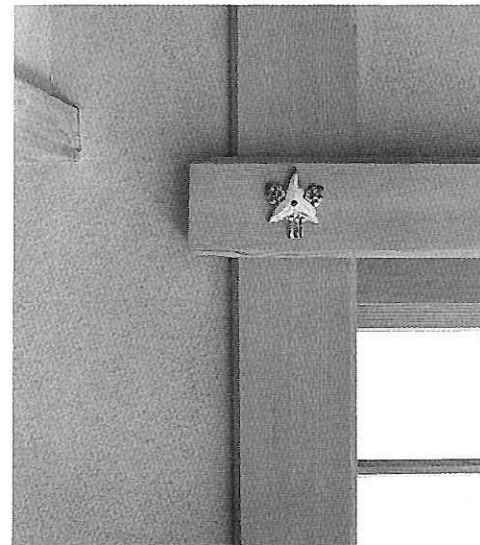
竣工：1972年



RCの本屋（数年前設計）に、純木造の広間と小間を増築した例である。

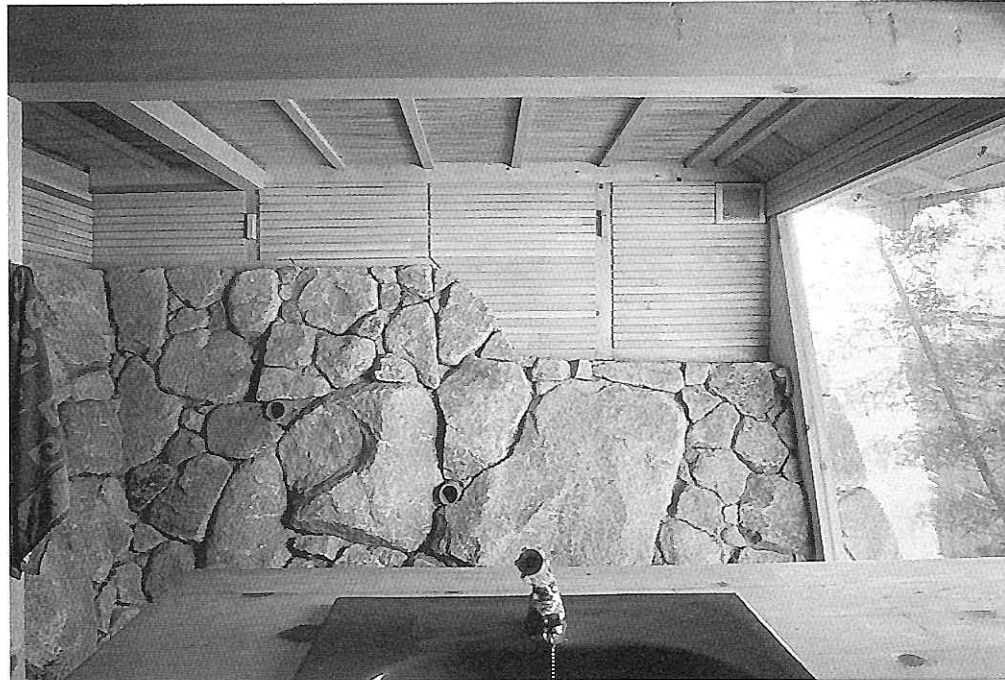
技術的に苦心したのは、当然取り合いの雨仕舞だが、このとき主題にしたのは、一般に京間を基本にしている日本間の構成を関東間に置き替えたかどうかという試みであった。モデルにしたのは東求堂と妙喜庵である。この各部寸法を、比例的に（単純ではない）関東間に変換させた写しである。完成後それと感じた人はいない。（広瀬）

PHOTO: HIROAKI MISAWA



肆木の家

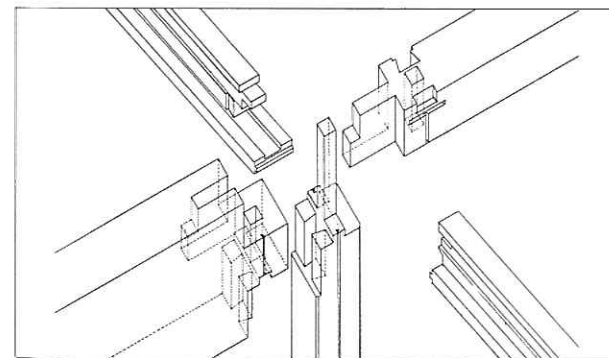
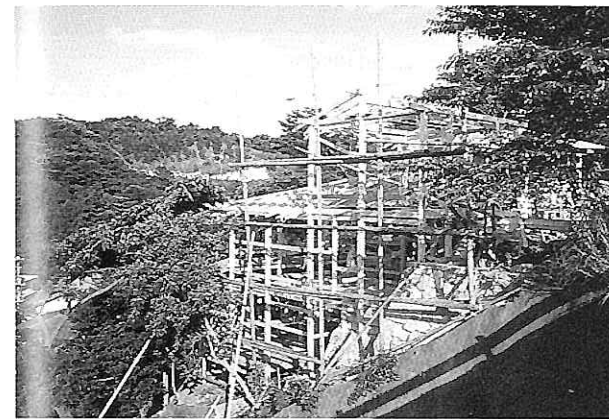
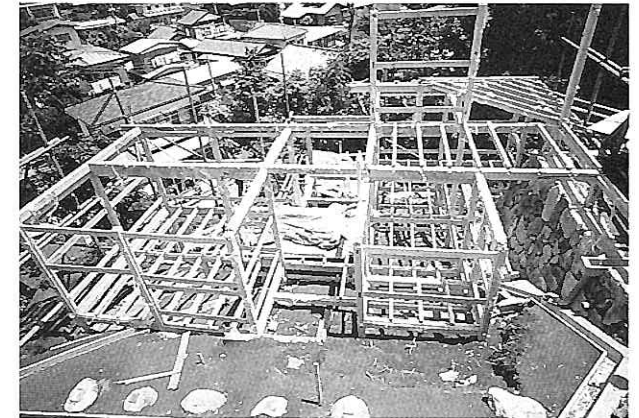
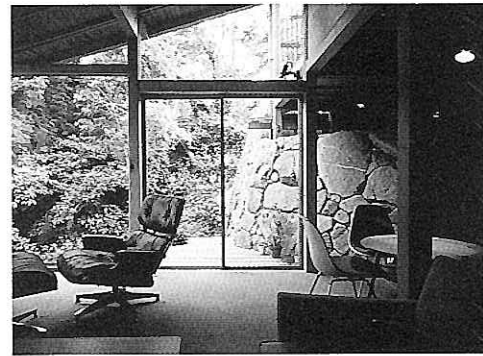
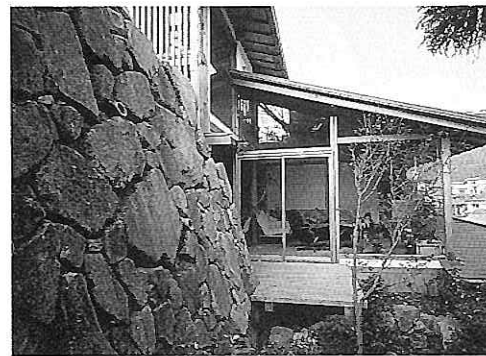
竣工：1983年



この家の説明は各誌で発表しているので、改めて書くこともないが、こうしたある程度徹底した実験は、自邸でなければ出来ないし、また、大学研究室にしなければ不可能であったかもしれない。

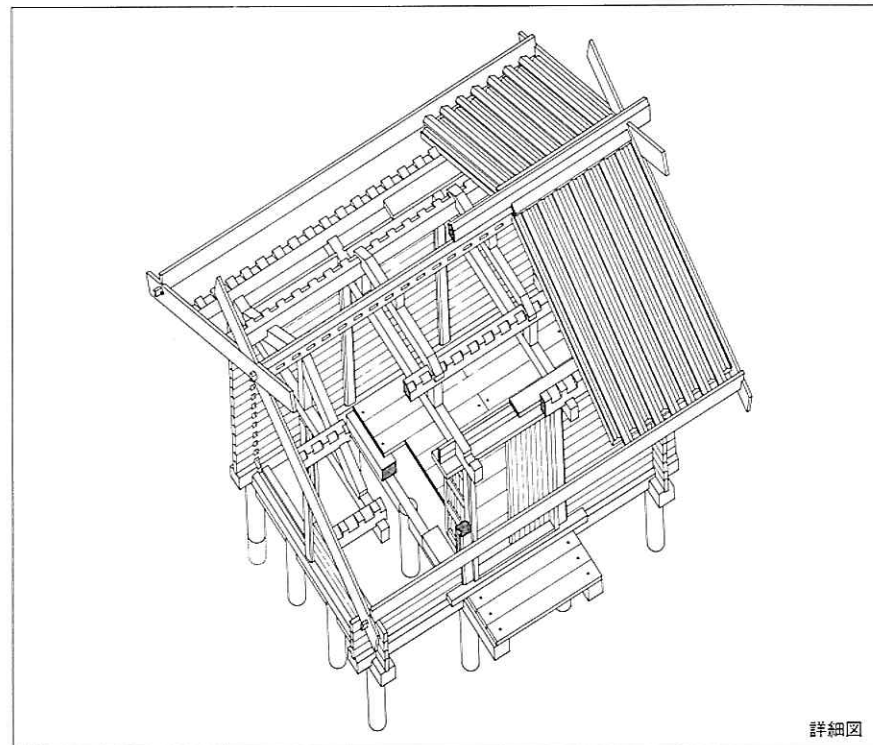
ほとんどをズブの素人集団で造り上げたが、筋違という斜材を、小屋簷も含めて使っていない家が、10年たった現在、壁にヘアクラックひとつ入っていないし、外周の plaster 真壁には雨のシミもない。
(広瀬)

PHOTO: KENJI HIROSE



富士市高床建物復原

竣工：1985年

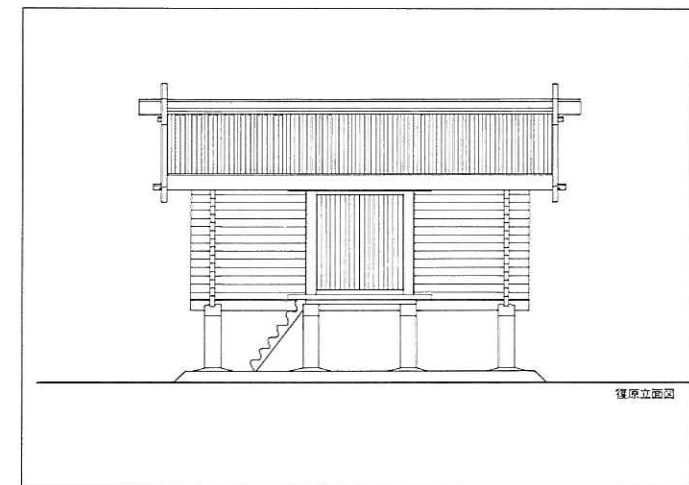
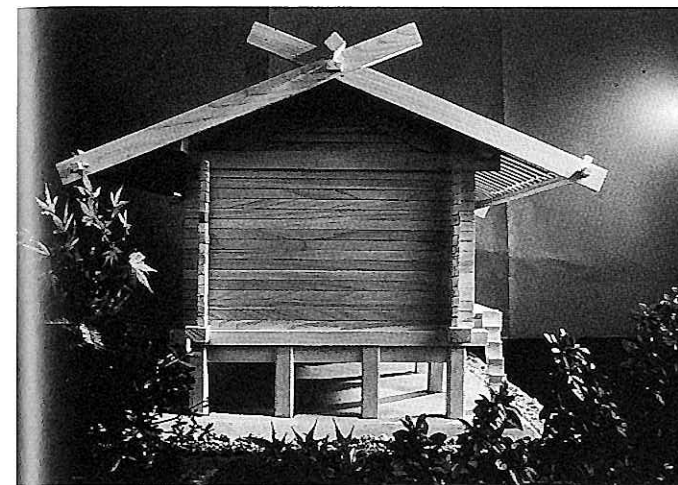
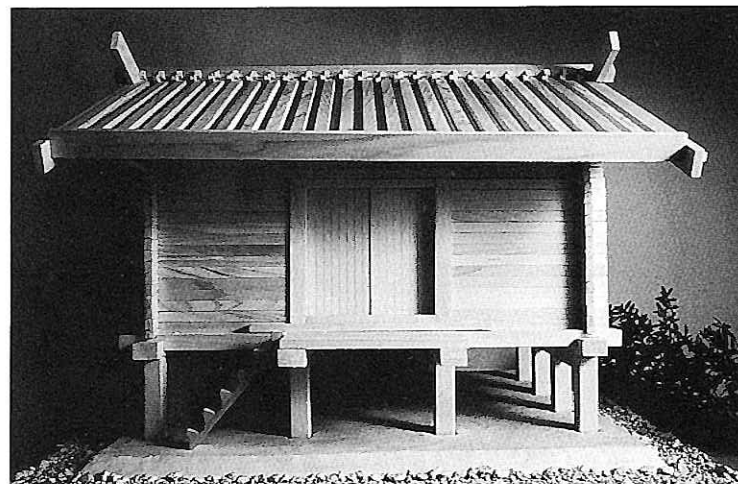


詳細図

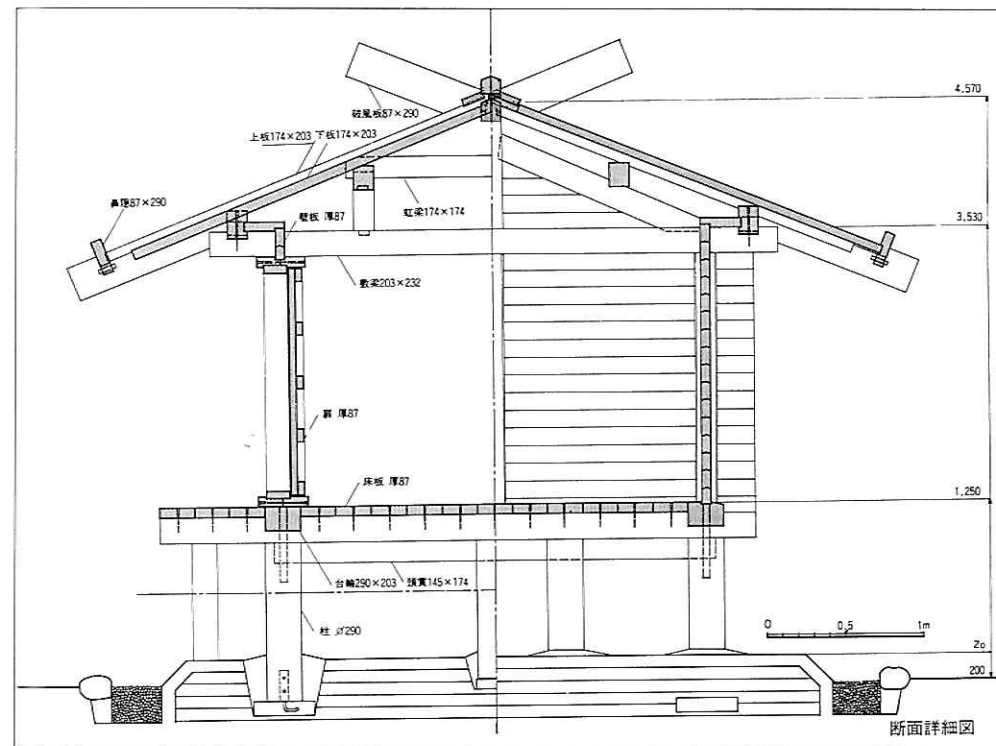
これは富士市の東平遺跡に復原された高床倉庫である。東平遺跡は、奈良時代から平安時代初頭期の大集落址で、竪穴住居址、堀立柱建造物址が数多く確認されている。

復原された建物は、堀立（一部布基礎）高床、壁は板壁、屋根は法隆寺の裳階と同じ板葺という構成で、3間×3間の建物ながら、屋根材から壁材まで、すべて木材加工を要する。復原にあたっては、建物はもとより工法などについても当時の技法使用をめざしたが、材料の問題、建設地における安全性の問題、管理公開上の問題などで、一部設計の変更を余儀なくされた。

PHOTO: KENJI HIROSE



復原立面図



断面詳細図

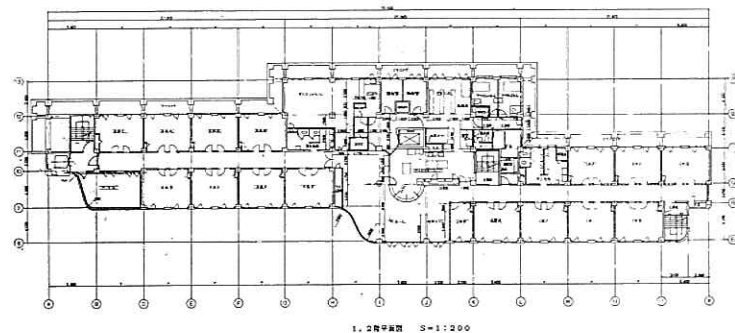
長谷川病院

C棟 竣工：1987年



この病院は事務所時代からの施主で、C棟の計画のときに相談を受けたのがきっかけで、以後ふたび設計を依頼されるようになった。

C棟は、簡単なコンベ形式でアルコム案が採用されたが、工費の調整がつかず、やむをえず研究室で実施設計を行った。(広瀬)



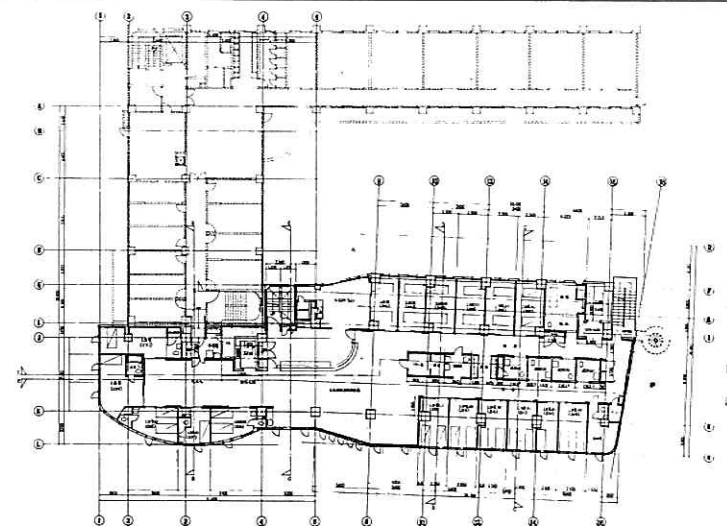
1. 2階平面 1/200

長谷川病院

D棟 竣工：1991年

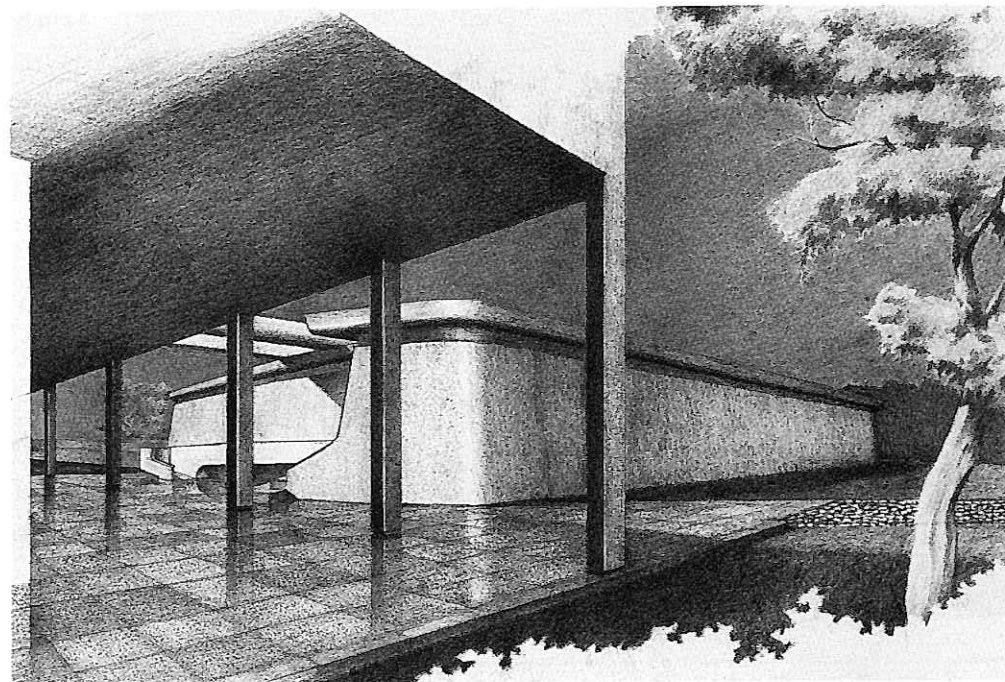


D棟は、2年あまりの間使用目的が変転し、その間数種の計画案をつくったが、最後に決定したのが現建物である。これは三登君と尺田君の事務所が実施設計と監理を担当している。(広瀬)



三殿台住居跡覆屋計画案

計画：1990年

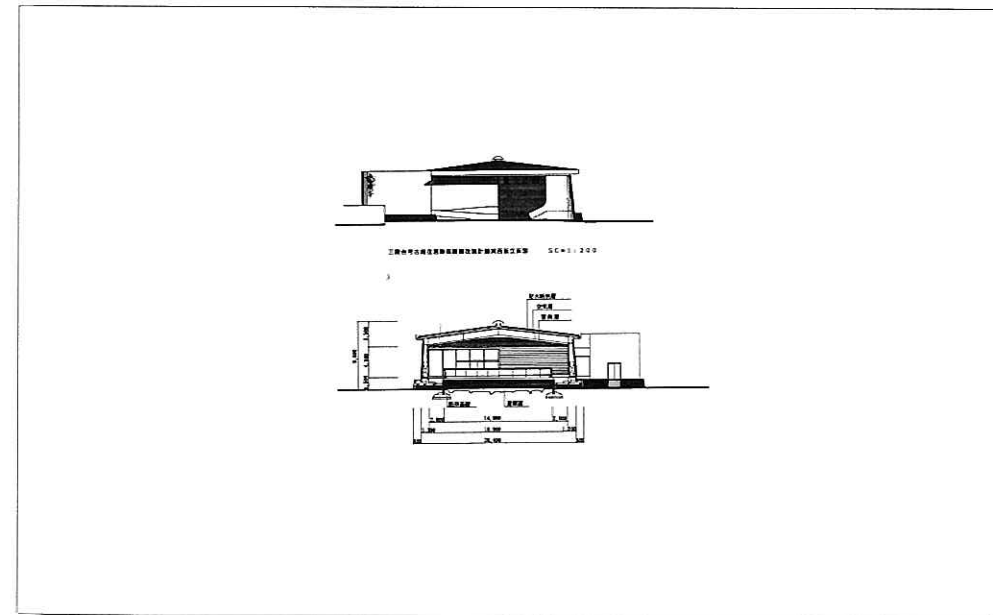
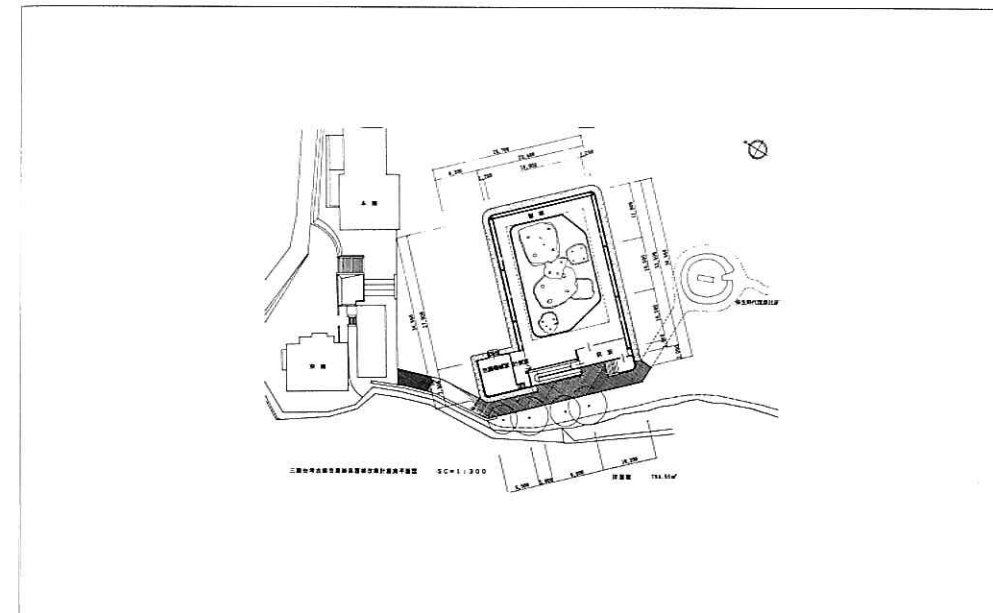
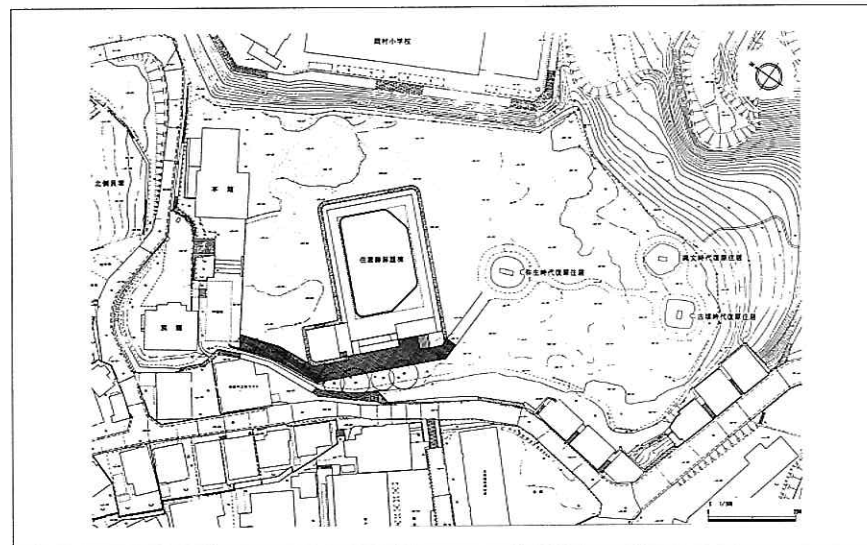


この建物は、現覆屋が老朽化したので、その建て直しのための計画である。

ここは国指定史跡で、弥生と縄文の住居が重複した集落であった。旧覆屋の欠陥とされていたのは、土の乾湿に対応できず、土崩れや菌の発生による破壊がおこり、この種の住居跡の保存にならない状態であったことである。その改良案を提案することが、この計画の主たる目的であった。

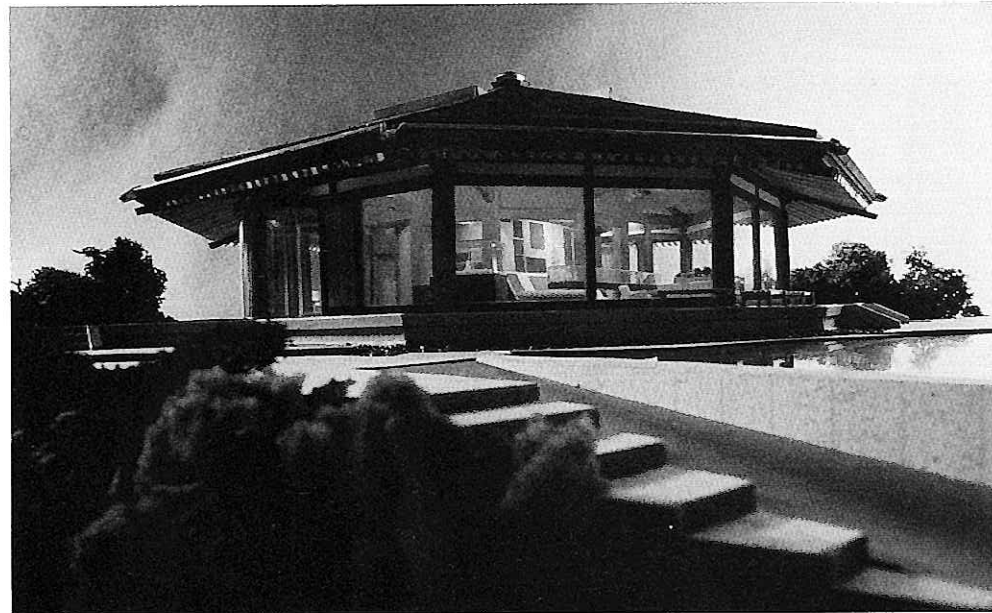
これは矢野君のところでは受け、実施設計を尺田君のところで行っている。本年中に着工の予定である。

(広瀬)



上野国分寺ガイダンス棟

計画：1991年

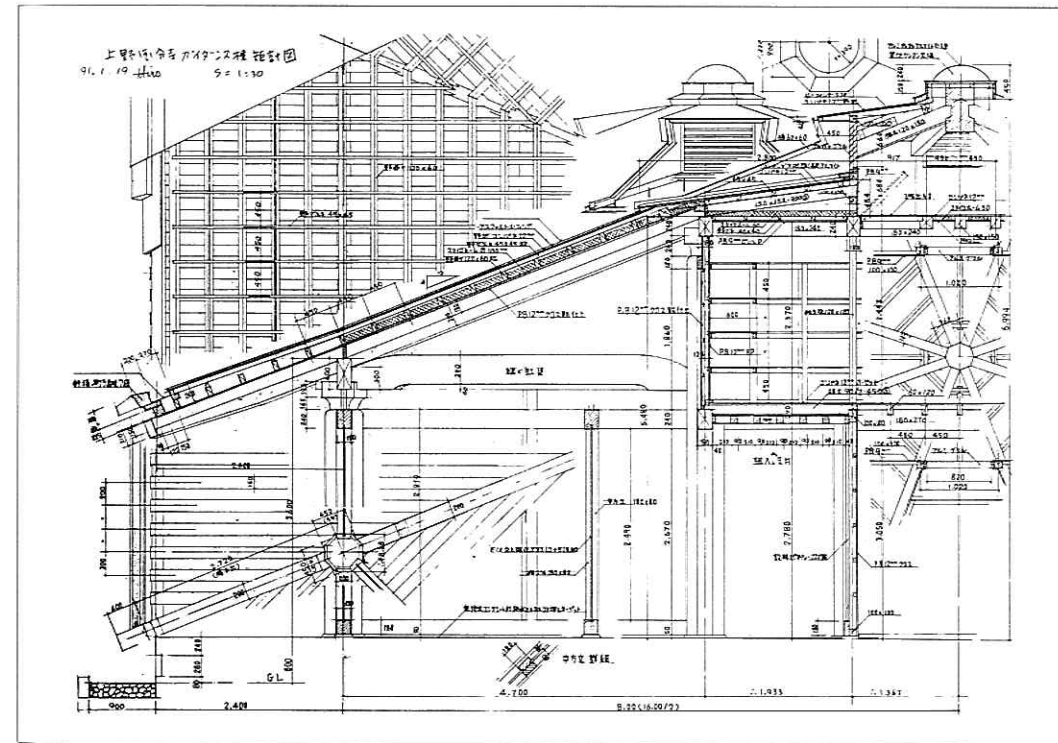
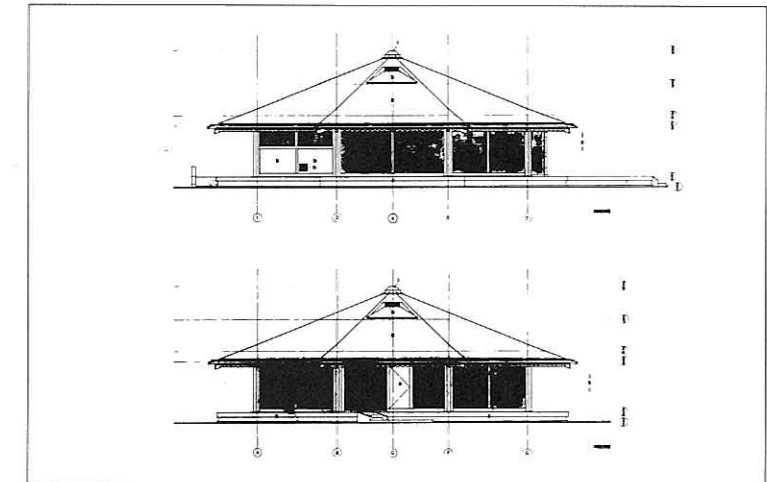
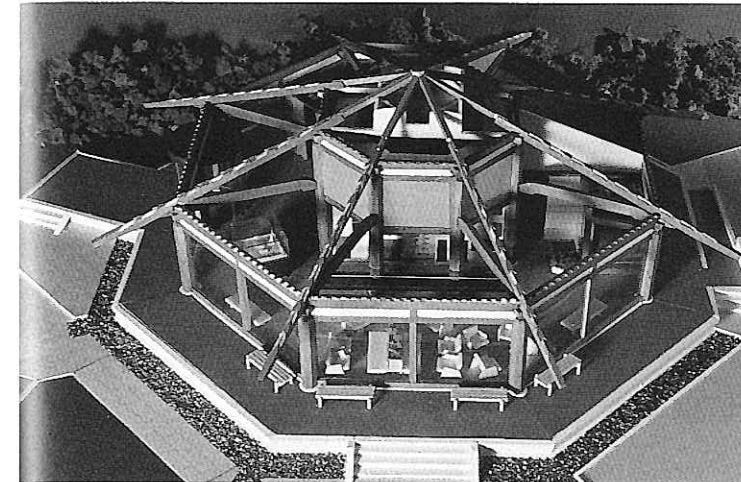
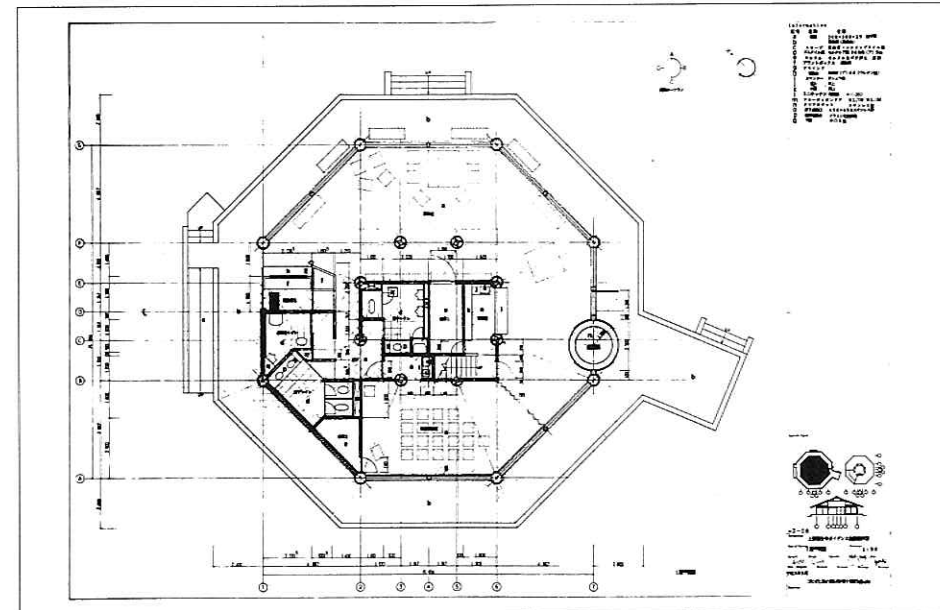


これは、上野国分寺跡の整備計画の一環として南面築地前の広場に建てられる施設である。

上野国分寺の整備は、南面築地の大半と金堂および塔の基壇の復原が完成している。これらはすべて創建時の構法を完全復原して行われているし、つぎに予定している南大門も同様である。

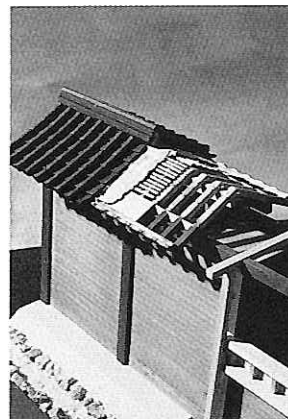
したがって、このガイダンス棟もこれらの復原施設と異質にならないように、完全木構造で設計した。本年11月着工、来年（1993年）3月完成予定である。（広瀬）

PHOTO: KENJI HIROSE



上野国分寺築地塀復原

竣工：1992年

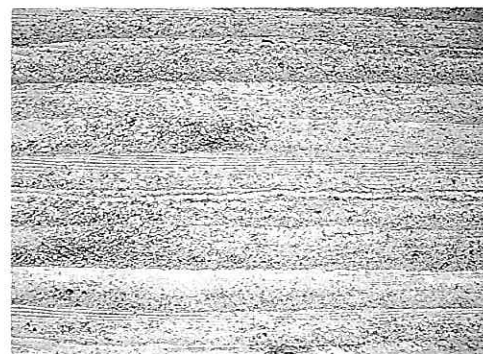
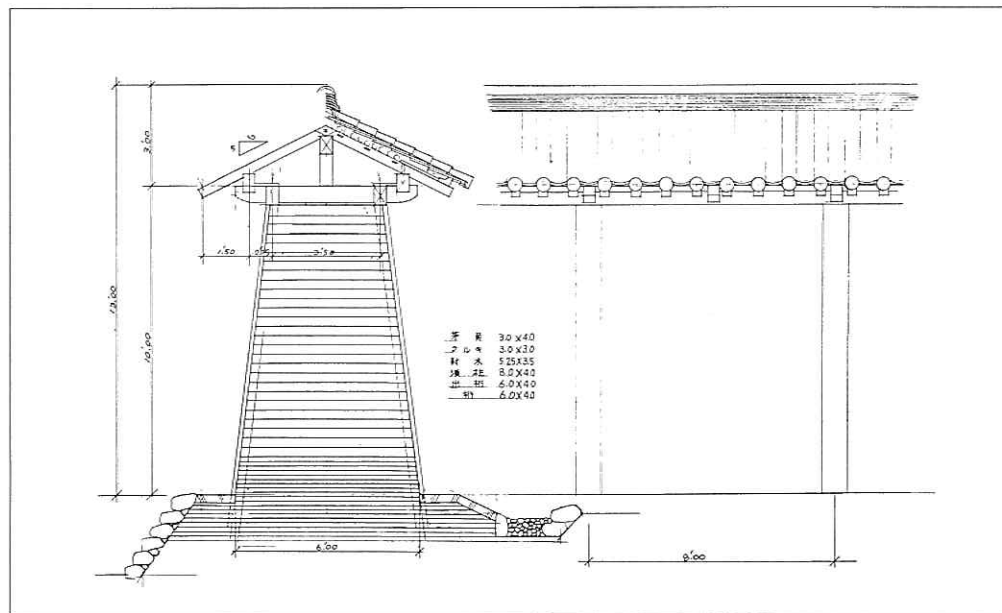


これは、この10年来継続されてきた上野国分寺跡（前橋市）の整備計画の一環として、最初を実施された南面築地である。

なにぶん鎌倉以前の築地塀は現存していないので、発掘されたわずかな痕跡を手がかりに延喜式や营造方式を参考に復原している。工法は奈良時代そのままに再現することを目標にして、版築をはじめ、ほぼわかっている限り当時の手法によっている。この時、同時に金堂と塔の基壇も復原された。（広瀬）

PHOTO: KENJI HIROSE

PHOTO: HIROSHI MORIKAWA



復原された版築の様子

PART-2

広瀬研究室の歩み

1 研究と論文

ここでは研究室時代の主要な研究生活をまとめる意味で、論文について、主なテーマと広瀬自身による解説を掲げた。紙面の都合で日本建築学会に発表した論文だけを取り上げてあるが、多種多彩なテーマがある。

各論文のタイトルについては、PART-4の年譜を参照願いたい。

（编者）